

序

本書は、2023年2月17日から19日にかけて国際日本文化研究センター（以下、日文研）を会場にして開催されたシンポジウム「日本文明の再構築——岩倉使節団150周年に寄せて」の各パネリストの報告の筆記録を一冊にまとめたものである。収録に際して、編集上の必要最低限の修正を施したが、大きな内容上の改変はしていない。このような編集方針のもとで、報告の文字起こしの収録を御快諾くださったパネリストの皆様にもまず篤くお礼申し上げたい。また、本シンポジウムは「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で実施し、企画と実施には岩倉使節団米欧亜回覧の会の協力を得た。感謝の至りである。

本シンポジウム企画の趣意については、本書に収められた拙稿で述べてあるので、そちらを御参照いただきたい。ここでは、シンポジウムを終えた今抱いているいくばくかの感慨を記しておこう。

このシンポジウムのタイトルとして、「日本文明」と掲げた時、「さすが日文研」との快哉の声がいくつか耳に届いた。戦後、日本文明論が盛んに論じられた時期があった。それは、戦後の復興と高度経済成長を達成した自信に裏打ちされて、日本の独自性を歴史的に弁証するという背景があったように思う。だとすると、日本文明を論じる根拠は今や霧散したのではないか。われわれが生きているのは、戦後の成長神話など過去の栄光としてもはや振り返る余裕すらなくなった停滞と喪失の時代と言っているからだ。このシンポジウムには、日文研が幹事を務める「国際日本研究」コンソーシアムにも呼びかけて、若手のパネルを組むなど次世代研究者の積極的な参加を心がけたが、彼らにとって「日本文明」というワードがどのように響いたのかは、残念ながら決して定かではなかった。

実際、シンポジウムのなかでは、ディスカッションの場において、「文明」を問うことへの懐疑的な声も聞かれた。Civilization という語への日本的偏愛が指摘されたり（ピーター・コーニツキー）、「そもそも」史観と「たまたま」史観という表現で日本の近代化の必然性と卓越性を相対化する視座が唱えられたりした（五十嵐恵邦）。それぞれ傾聴に値する見解であり、日本文明を論じる時に重々肝に銘じておく必要がある。

そのうえで、なぜ日本文明なのか。それは、日本という単位が世界を構成するひとつの要素とアクターとして現に成立しているからである。企画者として考えたのは、日本とは何かということではなく、日本に何ができるかということだった。より具体的に言えば、内外に張り巡らされている様々な関係性の網の目のなかで、日本がどのような位置と状況に置かれており、それに何が期待されているのか、また何をなすべきなのかと

いう問いである。そのような課題は、田中明彦と酒井啓子両氏の基調講演でまさに突きつけられたものである。

以上のような見地に立てば、岩倉使節団 150 年を掲げた本シンポジウムにおいて、単に 150 年前の岩倉使節団という歴史イベントにのみ焦点を合わせるのではなく、日本研究の国際的関心を代弁する様々な報告がなされたことは、主催者として大きな喜びだった。なかでも、引き揚げ文学や沖縄社会のような周縁から日本を問う研究成果が披露されたことは特筆されよう。

岩倉使節団は、150 年前に西洋文明を受容しようとして欧米諸国を回覧した。それは、見渡せない世界地図のなかでの自らの立ち位置を知り、新しい社会のあり方を構築しようとした試みだった。150 年が経ち、日本が直面しているのは全く別の課題である。だが、日本を成り立たせている関係性を読み解き、それに即応した社会コンステイテューションのかたちを樹立するという課題は同じだろう。最大の違いは、日本を自己目的化せず、むしろ世界における日本の需要を探求して、日本を人類的な問題と取り組む道具とすべきころではないか。次なる岩倉使節団とは、そのような課題探求のための知的冒険の旅であり、このシンポジウムがそのためのキックオフであったならば、企画を立てた者の一人としてこれに勝る喜びはない。

最後になるが、シンポジウムの実現のために抜群の事務能力で準備と運営を支えてくれた佐々木彩子氏を中心とする日文研研究協力課国際研究推進係の皆様およびプロジェクト研究員の坂知尋、西田彰一、藤本憲正（現日越大学講師）の各氏に深甚な謝意を表したい。西田氏は本報告書の編集でも、細心の注意を払って尽力してくれた。心より感謝申し上げたい。本書に何か不手際が残っていたとしたならば、それは编者である瀧井が負うものである。

2023 年 8 月

瀧井 一博